



オオハナアブ

丸っこい体形が印象的なハナアブです。大きな複眼には、迷路のような面白い模様があります。幼虫は水中で育ち、成虫はキクなどの花でよく見られます。

アブとハチはとてもよく似ていますが、アブは複眼が大きく羽が2枚に見えます。ハチは、触角が長く、羽が4枚です。

目 次

巻頭言	2
「山本五十六の名言から」	
教育研究所連絡協議会委員長 栗畑 寿一郎	
1 小さなころみ	3
「共同研究 2年間の研究のまとめ」	
2 学びの架け橋	4
「児童生徒が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を高める社会科学習指導」	
社会科 プロジェクト研究員 長山 武司	
3 ある教室から	5
「学びの芽生えを支える環境や援助」	
教育指導課指導主事 瀬戸 由里子	
4 研究所だより	
① パワーアップ研修を終えて	6
② 学習指導法研修会	7
③ プロジェクト研究 公開授業	8
④ 県教育研究所連盟研究発表大会	8
⑤ 新着図書のお知らせ	8

山本五十六の名言から

教育研究所連絡協議会委員長

栗 畑 寿 一 朗



山本五十六の言葉に、①『やってみせ、言
って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、
人は動かじ』という名言があります。これは
字の通り、実際にまずはやってみせる、やり
方や手順も言って聞かせて（教えて）、そして
やったことに対して褒める。…人はこのよう
にすれば気持ちよく自発的に動いてくれる、
と言っているようですが、そうなるためには、
「先を見通す力」も必要です。

この名言にはこれだけではなく続きがあり
ました。②『話し合い、耳を傾け、承認し、
任せてやらねば、人は育たず』これも字の通
り、話し合って、相手の言葉に耳を傾け、相
手を認めて、仕事を任せることによって人は
育っていく。対話と傾聴、認めて任せる。…
実は私には、このじっと聞く（聴く）ことが
とても苦手で、話の途中で自分から言葉を発
して相手の言うことを遮ってしまうことがよく
あります。

さらに、この名言は、③『やっている、姿
を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず』
と続くのですが、これも字の通りで、感謝の
気持ちを持ちながら、やっていることをうし
ろや下からそっと擁護し、信頼することが、
人の成長を促す秘訣でもあると言っています。

これらの名言①②③の根底には「信頼」と
いう言葉が隠れており、いずれも、私たち教
職員（教育者）に求められているものと言っ
ても過言ではありません。昨今は、一般企業
が求めるマネジメントの視点を学校現場にも₂

取り入れるようになってきました。しかしな
がら、学校現場は、一般企業のような営利追
求が目的ではありません。学校を構成する三
要素は、まず第1番目に「子ども」、そして次
が「保護者」、3番目に「教職員」ですが、こ
の3つに「地域」もプラスして、互いに信用・
信頼できる存在であらねばなりません。言い
換えれば“信用・信頼”という言葉の反対語
の“不信感”を「保護者」や「地域」に持た
れてしまわないようにしなければなりません。

「不信感」をもたれないようにするためには、
最前線で教えている先生方が、“目の前にいる
この子のために何ができるか”、“この子の成
長を引き出すためにどんなことをしていくべ
きなのか”、そして、先を見通しながら“今は
ここまでできればいいが、そのあとにさらに
ここまでできるようにする手立てはこういう
ことをしていこう”と常に考えている教師集
団であって欲しいです。

“教育実践”とともに“教育研究”が常に
循環していくような、そんな学校になってい
ってほしい、そのためには“最後は先生方の
がんばりしかない”と思った山本五十六の名
言でした。信頼の上に立つ教育実践をこれか
らもぜひ継続していきましょう。



共同研究 2年間の研究のまとめ

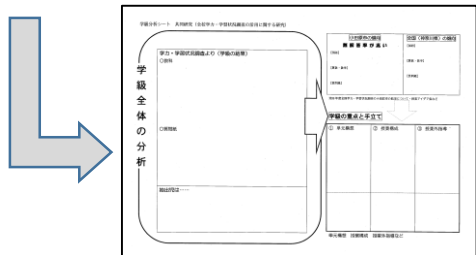
共同研究は、緊急又は将来要求される教育課題をテーマに研究を進め、研究成果を広く共有することを目的としています。この3月で、昨年度から始まった3部会の研究が終わりました。研究の内容をここで紹介させていただきます。詳しくは、4月に各校に配布する研究集録をご覧ください。

《全国学力・学習状況調査の活用に関する研究》

学習指導の改善を進めていくためには、結果を分析し、指導の方針を立て、それをもとに実践を行い、検証する一連のプロセスで行うことが大切だと考えた。本研究では、その流れがわかりやすいように「学級分析シート」を作成し、それをもとに授業実践を行った。

学級分析シートの作成と活用

- ①学校の結果
教科の結果、質問紙の結果のうち、特に
顕著なものを記入する。
- ②抽出児
学校の結果に近い児童を設定し、具体的
な指導に活かす。
- ③小田原市・全国の傾向
大きな集団の結果も加味して考える。
- ④学級の重点と手立て
授業改善の手立ての観点とは、「単元構想」
「授業構成」「授業外の手立て」の3つ、



《情報モラル教育の充実に関する研究》

本研究では、児童生徒、保護者の実態調査をもとに、情報モラル教育の授業実践を積み上げ、「情報モラル教育カリキュラム表」にまとめた。また、保護者への啓発活動についても検討し、実践を進めた。

(1) 授業モデル作成と授業実践

1年目の研究で行った授業実践を通して、「情報モラルの授業で大切にしたい4つの視点」を見出し、2年目はこの視点を大切にしながら授業実践を行った。

- ①子どもの実態を授業に活かす
- ②経験が少ない子もイメージが持てるようにする。
- ③困ったときの解決方法を知らせる。
- ④子どもの内面を育てる(心の土台づくり)

（２）情報モラル教育カリキュラム表作成

各教科・領域で実践できる内容を明確にするとともに、実践した授業モデルをカリキュラム表に位置付けた。

(3) 保護者への啓発

児童生徒の安全なインターネット利用に関しては、保護者の協力を欠かすことはできない。そのため、保護者に対する情報モラルの啓発活動について検討・実践を行い、資料を作成した。

《学校情報の発信に関する研究》

本研究では、学校ホームページ作成支援システムを活用した学校情報の効果的な発信・今後の学校情報の発信や交流の在り方について研究を進めてきた。

(1) 校内体制の充実

保護者アンケートの結果から、学校ホームページをより多くの保護者に見てもらうため、まず、学校ホームページを周知することに力を入れた。また、定期的・継続的に見てもらえるよう、内容をタイムリーに更新する校内体制やマニュアルづくりに取り組んだ。

(2) 児童生徒が関わる学校ホームページ

学校ホームページを、児童生徒の学びの成果を発信する有効な手段の一つとしてとらえた。児童生徒の作品をPDF化し、学校ホームページで発信した。

（３）小中・地域との連携を大切にした実践

同じ中学校校区の学校同士でホームページのリンクを設定したり、「地域からのお知らせ」というページを新設したりすることで、地域に根ざした学校ホームページをめざした。

学びの架け橋

児童生徒が主体的に学び、思考力・判断力・表現力を高める社会科学習指導

～社会的事象の意味を考える力を育てることを大切に～

社会科 プロジェクト研究員

宮田 泰範（下府中小学校）

長山 武司（酒匂小学校）

角野 篤（城南中学校）

椎橋 泰之（泉中学校）



1 はじめに

現代社会では、日々刻々と変化する多様な社会問題に対して、解決策を提案し実行していかなければならない。社会的な事象から問題を明らかにし、人と話し合いながら多面的・多角的に考え公正に判断し、その上で、「自分としては何に価値をおき、最終的にどのような意思決定をするのか」と社会的な価値判断をして表現できる児童・生徒を育てていく必要があると考えた。

2 研究の内容

1年目の研究 授業研究や理論研究を通して、用語だけをつなぎ合わせて答えるような言葉の理解にとどまらず、社会的な価値に目を向け、根拠をしっかりと持ち、いろいろな立場から考えられることを大切に、主体的に社会と関われる自立した個の育成をめざしていくことが共通の認識となった。

2年目の研究 同じ教材で、個と全体との両面から個を引き上げていく授業づくりに取り組んだ。難病を抱えて生きてきて、延命治療はもう行わないでほしいと自己決定する18歳の少女と、少しでも長く生きていてほしいと願う家族との葛藤を描いたドキュメントを共通教材とした。そして、小中の発達課題を視野に入れて、「個の尊厳」について家族と社会制度のあり様から思考・判断・表現する授業を構想した。いずれの実践でも、導入でドキュメントのDVDを視聴した後感想を書き、それを分析・検討して個の問題や全体の問題を設定し、それ以降の授業づくりを考えた。

（1）中学校1年

「18歳の命の選択から人権感覚を養う」

DVD視聴後の感想を検討すると、クラスのおほとんどが自分のことに引きつけて考え、延命拒否をした少女の意志の強さを認めたり、それでも延命すべきだとしたりと、主体的に捉えていた。そこで授業では、「普通の生活」とは何か、自分の親だったらどう思うかを問い、なぜ未成年は自分の判断で延命治療の継続などを決められないのかを考え、自己決定⁴権を行使するための社会的な条件について追

究した。

（2）中学校3年「人権の尊重と日本国憲法」

DVD視聴後の感想を検討すると、今の自分と照らし合わせてとらえる傾向が強くみられた。「今の自分がどれほど恵まれているかわかった。しっかり生きなくてはと思った。」と自己表明するのである。一見すると、主体的な価値判断をしているが、「少女」への共感やその自己決定への思考・判断が弱いという課題がでた。そこで授業では、「病気や障がいのある人に、なぜ生きづらさを感じさせるような社会なのか」と問い、一個人として、社会として、何ができるかについて話し合いを行った。

（3）小学校6年「暮らしの中に生きる憲法」

DVD視聴後の感想を検討すると、「つらかった」「かわいそう」等の心情的なとらえが多くあった。そこで授業では、何が「かわいそう」と考えるのか、少女の母親が「皆さんと変わらない生活でした。」と話したことの意味、そしてなぜそのような生活を送れたのかについて追究し、暮らしの中に生きる憲法（基本的な人権の尊重）について考えた。

3 おわりに

横浜国立大学教授 重松克也先生から指摘された成果と課題を記して、2年間のまとめとする。大きな成果は、小中学校の教員が共同で教科内容の研究をし、同一の教材を設定し、発達段階に応じて実際の授業づくりに取り組むことがとても有効であると確認できたことである。共同的な関係づくりを基に研究が進展していくことが、社会的な価値判断をして表現できる児童・生徒を育てていくことにつながるのである。課題としては、指導する上での児童生徒理解のあり方や教科内容に関する研鑽が大きく影響することである。個が表現した事柄を評価するには、単に知識（情報）をつなぎ合わせているかどうかだけではなく、心の底からそのように思考し判断し表現しているのかについて授業者の知性と感性とを総動員しながらつかむことが大切である。



学びの芽生えを支える環境や援助



教育指導課指導主事

瀬戸 由里子



ある幼稚園を訪問した時のことです。年長の教室で室内遊びが始まり、トイレットペーパーの芯を活用して製作した車を走らせる「ゴーカート遊び」のコーナーに、3人の男の子が集まりました。自分たちで作った坂のコースで車を走らせ競い合っています。何度も負けたA君は、車を持って製作コーナーにいる先生に駆け寄りました。

「(車体にあいている) 穴が小さくて、タイヤが動かない!」

「どうしたいの?」
先生が問いかけます。

「こっちの穴を大きくしたい。」
A君は、先生に、竹ひごが通っている車体の穴を、千枚通しで大きくして欲しいと頼みます。

「穴を大きくすれば、タイヤが速く回るよ。」
よく回るようになったタイヤをクルクルと回すA君に、

「タイヤの回り方に目をつけるなんて、いいことに気がついたね!」

先生が褒めると、コース作りを見守っていた他の先生が、

「A君、すごいね!」
と、また、褒めました。2人の先生に褒められたA君はとてもうれしそうです。

その後、ずっと製作コーナーで作業をしていたB君が、みんなとは少し形の違う、カッコいい車を持ってコースにやってきました。満を持したようにB君が車を走らせると、その車は、誰よりも速く長く走りました。すると、A君はすぐに自分の車を持ち、製作コ

ナーに一目散に向かい、道具や材料がきれいに分類されている棚から、トイレットペーパーの芯を手に取りました。ここから、再びA君の改良が始まります。車体の先を新幹線のように尖らせたいA君は、どこからはさみを入れればいいのかわかりません。

「どうやって切りたい?」
横で見守っていた先生が、声をかけます。

「こうやって…」
A君は指で形を示しました。
「それをマジックで書いてごらん。この線通り切るんだよ。」

先生は、はさみを手渡します。切り終わった瞬間、

「できた!!」
と、A君の顔がパッと明るくなりました。先生もやさしくニコッと微笑みます。幼稚園には、子どもがおもしろいと感じたり、関わったりしたくなるものがあふれ、安心して学んでいくための環境の工夫がたくさんありました。子どもたちの興味・関心はそのような環境づくりによって高められるのです。そして何より、先生方は、対話を大切にし、子どもたちに「どうしたいの?」と問いかけ、たくさんの励ましの声をかけていました。子どもたちは、それらの援助を支えとして、発想を豊かにし、考えを深め、粘り強さを身に付けていくのだと思います。

「小学校、中学校へと続く自発的な学びの土台が幼稚園にはある。」ということ、改めて感じる事ができた、貴重な一日でした。

研究所だより⑦



パワーアップ研修を終えて ～この一年間で身に付いたパワーとは～

研修相談員

瀧 本 朝 光
押 切 千 尋

意欲的な中堅教師、または若い教師がパワーアップすることをねらいとする研修です。今年度は、教育研究所長と2名の研修相談員が研修にあたり、小学校16名、中学校6名、計22名の研修者が1年間の研修を終えました。

小学校の部

研修を魅力あるものにしたいという思いを持ち、研修者と互いに学び合う姿勢で取り組んできました。それぞれの研修者が、自ら研修テーマを設定し、授業を通して考えてきました。研修者の言葉を紹介します。

「一年間を通じて、話し合う力を高めていくには、学級経営や授業力の向上が必要不可欠だと強く感じた。そして、それとともに、話し合うに値する課題や学習問題をどうやって子どもに提示するかによって、子どもの話し合いの熱中度も変わっていくのだと分かった。研修での学びを次年度にもしっかりと行かしていきたい。」

「自分がこれまでモヤモヤしていたことや、考えを持ち行っていたが自信がなかったことに対して、相談員の先生とじっくり話し合いながら研修していくことで、明白になったり自信をつけたりすることもできた。」

パワーアップ研修の良さの一つに、自分の学校・学級で研修を行えることがあります。これからも、大変だったけれど、受けて良かったと言ってもらえる研修にしていきたいと考えています。来年度も、意欲のある先生方と出会えることを楽しみにしています。

中学校の部

今年度は英語科3名、理科、数学科、社会科が各1名の6名でした。各先生方のテーマを見ますと、小学校同様「互いに学び合い、伝え合いを大切にした授業」といったテーマが多かったです。多くの先生方が「言葉を通した集団の学び合い」を大切にしたいと考えている結果かと思います。先生方には年間を通して自己のテーマに基づいた授業改善に取り組んでいただきました。その結果、

○単なる形だけの「関わり合い」で終わらないようねらいを明確にする。

○自分の意見や考えを持って関わるには、もとになる基本的な知識の習得が大切である。

○課題解決のためにどう関わり合うか課題によって思考の深まりが変わってくる。

○「話す・聞く」といった基本的な言語力（姿勢）の育成が大切である。

といった活動の視点を大切にしながら、教師が意図的に授業に「仕込む」ことが重要であるということが確認されました。「この研修が自らの授業をあらためて振り返る機会となり、授業改善の方向が見えてきた」といった先生方の感想が、研修の一番の成果かと思います。授業後の研修では学級経営や生徒指導なども話題になり充実した研修になりました。先生方の「これから」に期待したいと思います。



全国学力・学習状況調査の結果をふまえ、国語、算数・数学の学習指導法について研修を深め、指導力向上をめざした研修です。どちらの部会も、1回目は講師の先生の講演、2回目は授業研究の後に研究協議と実践報告を行いました。講師の先生からは、授業改善のために何を大事にすべきなのか、明確な話を聞くことができ、各自の実践に活かすことができました。研修参加者の皆さんが実践した「実践報告集」を2回目の研修で配布しておりますので、今後の授業づくりにお役立てください。

<国語部会>

1回目 講師 三浦 修一 先生

(横浜国立大学 教育デザインセンター

主任研究員)

国語科で育てる学力を確かめよう

～今、課題は何か～

★全国学力・学習状況調査で問われる「学力」とは？

調査問題には、「これからの学力向上において必要なものは何か」というメッセージ性がある。「覚えた知識をペーパーテストで再現する学力」から「教科を超えた『リテラシー』という学力」へ。

★国語科の授業を変えるために

- ①教科書「で」学習する授業
- ②確かな学習評価に基づく授業
- ③「テストの答え」がゴールでない授業
- ④ことばの使い方を「仕込む」授業
- ⑤「学び方」を育てる授業
- ⑥「振り返り」の位置づけと内容の工夫
- ⑦「学び方」のカリキュラム作成

2回目 講師 富山 哲也 先生

(十文字学園女子大学 教授)

児童生徒が主体的に取り組む

国語科授業の構想

★学力の3要素

- ①知識理解→何を知っているか(できるか)
- ②思考力・判断力・表現力→知っていること(できること)をどう使うか
- ③主体的に学習に取り組む態度→どのように社会と関わるか

★国語科授業の考え方

『言語活動』を通して、指導事項を指導する」ことである。「付けたい力」と「付けたい力を付けるための手段」を明確にした単

元計画の作成が大切である。

<算数・数学部会>

講師：池田 敏和先生(横浜国立大学教授)

数学的思考力を育てる授業づくり

★全ては試行錯誤から

授業の中に児童生徒が試行錯誤できる課題の提示や場面の設定を行う。様々なケースについて帰納的に試行錯誤することが「考える」ことのスタートである。

★授業中、教師は何をするのか？

- ①思考の仕方：「試行錯誤の場面を設定」
- ②クラスで共有：「児童生徒の考えをつなぐ」
- ③論点を明確に：「問いを焦点化する」
- ④根拠や関連性、発展性を問う：「ゆさぶる」
- ⑤価値付ける：「ほめる」

★目的に応じた表現を！

表現方法には、図、グラフ、表、絵、具体物、式など様々にある。1つの事象に対し、多様な表現方法を考え、関連づけることが大切である。

★子どもに身につけさせたい考え方の基礎・基本

- ①問題を的確に捉えようとする
「何が問題なんだろう？」「生活場面では？」
- ②自分の経験を振り返り活かそうとする
「前にやったことないかな？」
- ③たたき台の検討修正、別の方法を探る
「もっといい方法はないかな？」
- ④思考の振り返り、本質を見出そうとする
「どうやって考えた？」「共通点は？」
- ⑤広がりを見出し、次の一歩を見出す
「条件を変えるとどうなるのかな？」



研 究 所 だ よ り



プロジェクト研究 公開授業

プロジェクト研究は、各教科における学習指導のあり方を研究するとともに、今日的課題に積極的に取り組み、その研究の成果を小田原市の小・中学校の教育活動に活かすことを目的に、平成26・27年度の2年間で研究を行ってきました。今年度は、研究のまとめとして、それぞれの部会で公開授業研究会を実施しました。また、2年間の研究の成果を冊子にまとめました。この冊子には、指導案や資料等も掲載しますので、ぜひご活用ください。

教科等	月日・場所	授業者	内容
国語	12月7日 芦子小	岩立裕子 教諭	かさこじぞう
社会	1月25日 下府中小	宮田泰範 教諭	暮らしの中に 生きる憲法
道徳	1月13日 片浦小	中村絵里 教諭	ブランコ乗り とピエロ

県教育研究所連盟研究発表大会

10月13日に、横須賀市立横須賀総合高校で開催されました。小田原市からは、平成25・26年度「幼保・小の連携に関する研究」について、木村弘子先生（桜井小）、山室祐美子先生（東富水幼稚園）、村越直子先生（曾我保育園）、満武有里先生（たんぼぼ保育園）に発表していただきました。

充実した研究発信の場となりました。



8 -

新刊図書のお知らせ

今年度、教育研究所で新たに購入した図書の一部を紹介します。借りる場合は、直接来所するか、市内共有から申込書を印刷し、申込書を通送で研究所にお送りください。

教科・領域等の指導に関するもの

「変わる学力、変える授業」 高木 展郎 三省堂

「実践から学ぶ 深く考える道徳授業」

加藤 宣行 こうぶんエデュ

「単元を貫く学習課題と言語活動」

水戸部 修治 東洋館出版

アクティブラーニングに関するもの

「授業を磨く」 田村 学 東洋館出版

「アクティブラーニング入門」 西川 純 明治図書

特別支援教育に関するもの

「特別支援教育のとおき授業レシピ」

筑波大附属大塚特別支援学校 学研教育出版

「教室でできる特別支援教育のアイデア172小学校編」※Part2もあります

月森 久江 図書文化社

ICT教育に関するもの

「タブレット端末を活かす実践52事例」

D-project 編集委員会 学研教育出版

「教室にICTがやってきた」

葛飾区教育委員会 NTT出版

幼児教育に関するもの

「子ども主体の協同的な学びが生まれる保育」

大豆生田 啓友 学研教育みらい

「よくわかる！教育・保育ハンドブック」

無藤 隆 フレーベル館

「気になる子の視点から保育を見直す！」

